枕草子すまう抄　六

はくとぶ 作物所
細流云金銀細工乃ぶ
きるへし 拾芥云作物
所在進物所西有別
當預熟食。時乃
此別当り補せられ
此のよし。勘物お注
されたやうやうして
細工人乃ぶく時柄絵
やうあつて作付し
これがまにつきまつらば
女院の若きし絵乃
中にも細工世ハ呉風に
ありんとし時柄が絵
をわりんとてあるし
たげいしや東宮に
中関白殿乃院もと
め。三条院の春宮まで
かくせしろまいら給て
淑景舎よかくするとき

はくとぶ乃別当する時。されがまた
まやまんとろふかいのしん梅のこやう
やるとて。これがやうが作るべしとかきさ
あすんあれやう。されど乃世のまにしずかの
やさを見ぬ津なくく。されがかさけるよ
これがすこにつきまつらばこやうにたる
なるべくれとて。殿上よやまとされば。さ
どりて見ぞ。みじうわらひける。
こゝろちうちてここうりそりか
たげいしや春宮りまつりのふかりの
事など。いうぞいめてさうしねことき。正
月十日まきりまひく。また定子の流るよ

栄花物語に見えて摂政殿
の君たちにて春宮女御
をば帝のひさしき女
ぬれば関白殿させしさ
す中姫君十四ばかり
にならせ給ふね東宮に
まゐらせ給ふとある
花どもそびえて乃訓
まつらせたまひぬれば宣耀
殿ハ女御のひね淑景
舎にすませ給ふ
とかやいふなれバ
むかしの事なるべし
そ正暦三年のこと
とうくわでん　左京乃
淑景舎ハ清涼殿の北
にありて東ひの清涼殿より
和名抄　登花殿ハ弘
徽殿乃北なり
殿の東にて中関白乃隆公

御文などはしげうかよへど、またたいめん
などはなきを、二月十日宮の御方に
わたり給ふべき御せうそこあれば、つね
よりも御しつらひ心ことにみがきつく
ろひ、女房なども皆よういしたり。夜中ばかり
にわたらせ給ひしかばいくばくも
なくてあけぬ。とうくわでんのひんがし
の二間に御しつらひはしたり。つとめ
て、いととく御かうしまゐりわたして。暁
殿うへひとつ御車にてまゐり給ひ
ぬ。宮は御曹司の南に四尺の屏
風西東に御座しきて

やうハ中関白殿道隆公の女にて
高内侍の貴子と号す。儀
同三司母とはなり。左京
淑景舎はこの御事也
まいりて　わかぎみ
あはれに侍りけん
侍んよの事
しやくぜんじくやう
積善寺供養　栄花物語
法四月にて摂政殿の法興院
にて摂政殿の法興院
のうち別に御堂を
させ給ひて積善寺と名
付させ給ひて御堂供養
いとしくいかめしうせさせ給ふ
正暦三年のこと中関白の
父兼家公の建立也
こうばいのうさなる紋
紅梅ハ表紅裏紫二月の
衣也固文浮文ともに胡
曹松のまり或説
固文ハ綾の織物

御たゝみしとねうちをきて御火おけばか
りまゐれり。御屏風の南御帳のお
まへに女房いとおほくさぶらふ。こなたにて
御ぐしなどまゐるほど、しげいさや
見奉りたりやとゝはせ給へば、まだいかでかさく
ぜんじくやうの日たゞうしろをはつかに
きこゆれば、そのはしらとびやうぶとのも
とによりて、我うしろよりみよ。いとうつく
しき君ぞとのたまはすれば、うれしくてゆ
かしさまさりて、いつしかとおもふ。こうばい
乃かたもんうきもんの御ぞども、くれなゐ
のうちたる御ぞ三重がうへにたゞひき

紋や綾文ハ唐織のごとし
とぞいふ
今ハ紅梅ハさきごし
紅梅ハ十一月より二月まで
着用の衣しとや申し
かさねハきぬもてはなれ
んとぞ二月十一月の比
かれども
こしきのかみなれハ
紅梅ハ裏かさね萌黄なる
さくら見るなれバ紅梅
をきるとかやいふ也
されど紅梅ハ紅に重て
似合ずとし紅梅ハこきなる
きぬとかさねれども
紅しバ紅とハうときもの
あれども
さてぬきりとさせ
流行のきぬ流行のきぬで
[illegible]

かさねとハおもてうらのいろのこと。紅梅ハさきごしより
濃紅のきぬなし紅梅のきぬよりハこき色なりとて
きぬとかさねかされ。今ハ紅梅ハ きさでもあり
ぬべしけれどもしきたのうくなれバ紅
りハあをきなとのかへすれども、いと
そでよりみゆるまでのこゝろなれ
めでたくみえしさせすまふなまめかしきいろ
ことよきひとへもやわらかなるなんども
やがてはらのこすゑのひありとせまぶしくれ
やがてれバやうぶまうひきそのぞく
ゆるしきさてのなかいでゝせまひぬれバ
をのしろものしろうきのわざとさきて
ごてんへごとてはなし流さやしの[illegible]
あきらかれバことくみえゆうへハしろきぬ

乃小まはり 貞観殿
和名云常寧殿乃小まはり
おりどれを清涼殿と
いふく淑景舎ハ昭陽舎
乃小麗景殿乃うしろ
にあれバこを西宣耀殿
きて西貞観殿ともいふ
まてにきる登花殿ハ
あるべし今の清涼殿
らひ登花殿乃東の二
间とあり。後涼殿官
城乃局頃和名紗すて
かへし
かゝさね 和名云背子
形如半臂無腰襴之裕
衣也楊子漢語抄云背
子ハ婦人表衣以錦為之
小野の三位 菅原輔正
勘解由長官在躬一男
現神北野殿是也正暦

かくびさしのこなたをれらうにあり女房ハ
人びとりのかふせびとてからきぬハ清涼殿
まゝへみなかくりかりかざり桜乃かざしぼく
ぎこうがいなどいみじくかざりなりつく
まりひきまゝくぞりはきまうとし、いと
なめめくしぞり桜のからきさねどもこされ
出るうすはきさ乃もあれ乃むまし絵
が将乃きさみ。小野乃三位のむまれ宰相
乃きこなどもちうくハはるかなかりし
とみるさとりこれ清くしれ清てうつ
まん乃うねれ。あをまうこれをしがうきぬ
くんさいひき[illegible]すきくぶりそすどいと

三年二月十五日叙三位公々神任大系図等ニ
侍るとあるものゝ乃ちうねめ
百寮訓要抄云采女と
ハ帝ニよりて選ばれ
をそひて天子にまゐ
するしなり陪膳なども
ゆゑ侍るなり女房ニ
侍るものゝ役なるは
ことなるべし
みてあげまゐりて
河海ニ昔ハ女房更衣
以下常に髪を上ゲず
幸ニ髪也也足軒云内の
女房ハ時ノ間ハ髪上
ゲて叙ニ髪
をいとぎ上るしと
后宮ノ侍ひと女房
人なども役とする者

女房ノ色かゝりけて
后宮へ乃礼義よる内
侍のかゝりめよ裳を
かけ乃ちかすのゝ侍
女れハ然ハ為て女
房ノ裳をかゝりこゝ
むもゝかきもや

ゝきこ乃ゝきこんのわ
りやゝある侍ゝなりて
・萠黄ノ固紋ゝ
りあるき出ゝ
あよかてゝうゝと
およ后宮れうゝき
ゝゝりこのゝ
をゝけゝく者ゝと侍
ゝ乃ゝゝる

げちやゝ（下仕ふまつる者と云ふ）て来女ゝ（ゝす）
ちゝてゝ下ばゝ人ゝ（唐め）ゝ（ゝ）ゝ
まいるゝゝ（修）ゝ（ゝ）ゝ
ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ
めいゝゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ
みゝあゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ
乃かゝなゝ
てゝゝつる扉風ゝゝわけつれゝ
かいゝみ乃ゝ
ゝゝゝゝゝ
ちやゝとの中ゝて柱乃ゝゝとわゝ
ゝなる。きぬのすゝ賞ゝとわゝきぬ
ゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
殿乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ乃ゝゝる二ゝゝ女房の
裳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひきゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こなたうらむきさて
今清少のぞく古
うしろむきにて関白殿の
おはしまし
めでたきさまのさまど
もとうらえみて
右衛門淑景舎まで殿の
を関白殿よろこび見
まふさまし
しげいしや乃あふききさ
るやうに
うるはしくむかひさし
きさるなし。源氏の空蝉
葵上乃ありさまを此
ありさまなる御作姫
君たちやうきそ同
しかるべし
せんようでんぢやうぐは殿
これ淑景舎より登花
殿へゆくみちなり。
廿二 宣耀殿は和名云麗景殿

御ひもさしてひさしの柱にうしろを
あてゝこなたざまにむきておはしましたり
ます。めでたき御ありさまどもをうちゑ
みつゝれいのたはぶれごとせさせ
給ふ。しげいさのゑにかきたるやうに
うつくしげなるに宮は
やすらかにいますこしおとなびさせ給
へる御けしきの。紅の御ぞに匂ひあはせ
給ふぞ。なほたぐひはいかでかと見えさせ
給ふ。御てうづまゐる。彼御かたのはせんよう
でんぢやうぐゑんでんをとほりて。わら
は二人。しもづかへ四人してもてまゐるめり

かくれみのゝやうなり
清少の身のあらはに見ゆるを
のたまふ。后宮やまと物
御簾のまより物の見ゆる
見て人ならずきらがお
れ。御ぞの裾を見ひても
かれはふるきとくいを
古得意也。清少がはなしと
よの得意ぞとてよく
知り給ひし物をとの也
うしやみしてのは
ゆかし関白殿は后宮の方をも
の御膳はなまうでとりし御や
けるぞすなとしる事
猿楽言也。狂言のこと也
ごとをのするも
大納言殿　伊周公也。正暦
三年に見乃名殺の中
納言より大納言に
なりしと栄花物語に在
三位中将　隆家也。栄花
物語四云此殿のあるが中
乃子の君は三位中将に

ぞや。御簾のまより見ゆるはと、とがめさせ
給ふに。少納言が物ゆかしがりて侍るならん
と申させ給へば。あなはづかし。かれはふるき
とくいを。いとにくげなるむすめどもゝたり
ともこそ見侍れなどのたまふ御けしきいと
したりがほなり。あなたにも御ぜんまゐる。
うらやましく。かた〴〵のはみなまゐりぬめり。と
くきこしめして。おきなおうなに御おろしを
だに給へなど。たゞ日ひと日さるがうごとをし
給ふほどに。大納言殿三位中将松君もゐて
まゐり給へり。殿いつしかといだきとり
て。ひざにすへたてまつる。いとうつくし。せ

あしきこと〳〵川にと思ひ
に正暦三年のはる
去年 伊周公は男左京
大夫道雅の童名
松君と称し四つ小松君と
彼大納言殿 童名乃姫
君いとうつくしきを
きみとこそ見れば父
小の方 貴子 并政殿ら位
ぎいとうきもちもしれ
しつきまつ松君ときき
こはいかにこそ正暦三年
流れふしぎとげんしたる
伊周隆家ら孫子居
又ハ園坐をと関白の
得せまして
流五ハこゝへらし
在原れ流る子を
いつのおもしく
東宮れば使て
三条院より御家今に
使まいし

きこえんにおもきひ乃流のこゝろぞくの下
かさねすびきちらされつが大納言殿も
ぬくさふきすげに中将殿ハらうたくさふい
ばれもめでたきをみえなまるに殿をばさる
よのかくはう乃流すくせそうめでたけ
まつ流ハうじいまでゆしかくてぢんにつき
待んとていらぎちあひねぬさりけるを
て或ア乃ぜそ…や流使より
まいられぬかとめやどり乃小まゐる
おほ君をとねそつ出て大へわれ流五六
又ハどらくいざとさせまひいまこさとる
さりかれぬかゞり。東宮乃流使まち

わたしの 源殿前へと
流五きやうくもあれども
かのまことしくそれ
関白殿流五てるまとまく
ともげいさらにすゝめまて
ども御ついに姓それ
出のそれねし。叡家公は
男子十五宮にいわや
流ぬ彩いまもらこ
おこなわぞ
関白のおつらいさ出彩
御傍にむ岩げてきり
し流又まつせすお扇を
さしぞても居るのさ
まふれ組
いそつもし 岩げにお
まちまてる

龍とりて
よわ乃お将まいらわ流久とおいれてわ
そのもおきえんあれば・こゝろのえん
に出とね代出させわ流又とおられく殿
うへ宮おで流らん・かえす流五ちや
あどあれごともきとききしあるねを。あれ
じが見得れで出あるねあわが流ねお
いまもあくそしよわずゆしまふあるあと
やまへ流おもてしいまして流みあそうす
うらかしえみあてるいとめでたしとく
あどうへときこしあくべがたくさるふもき
てかせまふてらくよりまひてどる
そりけせまわまくにいとどはりはげや

これ清子まちとてひき
出さんとせられしハ作らし
后宮乃皇子ちよませ玉ふを
そこなひし松君をうらみ
うらみておそれおほくも皇
子をけし出させ給ひしこれ
延暦三年二月よれハ一后宮
敦康親王すでに御ふ玉ひ
れさせ玉ふそねかりし
えんこまゐりて申し給ひ
逆道きて申し玉ふ
一条院乃后宮の清少なく
八后乃まなく

えもこゝにたちよせ
殿うへよの清おを立
去らく帝乃おほしめす
かくしらわれまする

宮乃清少なよわたしきみなる桁の小袖
ちるをこし出されけれバ二位中将のつけ
たまへばりむりひらきちゐね松君の
わらち桁のすそを離さんとうつくしわ
きらしすよふ后乃清子さらとく引出
さんとゐるくハ作りけるまでのあと
するをげりあちこの今やうくわるの
さぞ心とよろこびつゞの時ばかりよえん
とりまつるもいふれどもおくらちまよめ
きいたせすへバ今をしこすさまよせ給
ぬいやがて清帳りいつ世すひねれバ女房
南かまそりちよめきに出ねおわらう

殿乃清少へ(よ)えあづ(き)し后
て中宮大史以下此宮田
より草子も肴をとり乃るす
作付らく殿上人をとりそ
あそせともかまへて

山井大納言　道頼にて也
后宮伊周云すの別腹
乃兄なり。山井殿ハ三条
坊門乃北京極の西に奉り
あるよし給ふもあそれわ
永観乃三位の家也
華や栖たる山大納言業
ハ妻こおかうさ知りすの命
山の井といふ所よすむゆ
むすとめはかる解り
故をひぬといふ大納言業
といふ道頼なり
みちらせしらせられて
ねがひ聞えくバみちら
きれ今めて出させ給ぬ
あそし河海云作ぐとる
人乃まこと花るに発く

殿上人ことなわらわ殿乃清少へよあづさ
めらくぐるの方をかりさあへハこめらせ
あどけなせるゝまうこにみあらひく
女房さ物ひとくすれども(こ)におりしと
おもひわ日乃入りけりわきこゆせなひ
て山井乃大納言めしハれくみちゐきま
ひせなひくめてもせなる桜乃清なる
にハ紅乃清げ乃夕ぞへあろしかしこれハ
こゝめり山のおみ大納言いつりそね清
せうとやくもへとよりたるそうし白ひ
やのあるゝハ山大納言のもすくわするゝる
よのをも世の人をせちるいひわらしきこ

私記云御髪上御髪之事侍臣之間撰堪事之人供無定例皆着當色袍謂之御袿。八人にえらびて(?)はびんにまゐる人々は宮のきさいの直衣を着て伺候するを請ふ。ちかきほどの人をとゝのへて(?)内蔵頭は そのかみ道隆公の御子也。頼親の御弟(?)にてありし大将原(?)系圖にあり。むかし内侍のすけ ある権頭時明の女なり。一条院(?)の御乳母にて、さて(?)此(?)きはめて日本紀をよくよみ、式部とおなじころの人なれど、日本紀の局といひしたるなり。人々あるも此人にしたる(?)君なり。

きこゆるこそいとほしけれ。殿、大納言、山の井の
大納言、三位の中将、内蔵の頭などさぶらひ
給ふ。宮のぼらせ給ふべき御使にて、馬の
内侍のすけまゐりたり。こよひはえなどし
ぶらせ給ふを、殿きかせ給ひて、いとあるま
じきこと。はやのぼらせ給へと申させ給
ふに、春宮の御使しきりにあるほど、いと
さわがし。御迎へに女房、春宮の侍従
などいふ人もまゐりて、とくとそゝのかしきこゆ。
まづさは、かの君わたしきこえ給ひてと
のたまはすれば、さりともいかでかとあるを、
見おくらんなどのたまはするほど

まいてはふ(?)……
かうらんとも(?)
なりとも(?)……
いとめでたくをかしう
とて(?)……
内階也。細流云……
をも(?)……
ゆるさるゝ(?)
殿上より 此段呈第六
おのづから……けぬ
まやく(?)おちにけり
朗詠 大庾嶺之梅早落、誰問粉粧(?)。これは紀納言長谷雄乃詩序乃文也。一本お(?)……のでけしき……の内階よりとりわかぬ(?)……さる(?)そ(?)……

にもいとめでたくをかし。さらばとほ
きをさきにとて、しげいさやわたり給ひて、
殿などかへらせ給ひてぞのぼらせ給ふ。道
のほども、殿の御さるがうごとに、いみじう
わらひて、ほとほとうちはしよりもおちぬ
べし。

殿上より梅のみな散りたる枝
をこれはいかゞといひたるに、たゞはやく
おちにけりといらへたれば、その詩を
誦して黒戸に殿上人いとおほくゐたる
うへの御前きこしめして、よろし
き哥などよみていだしたらんよりは

二月ばかりの事なり
そも正暦三年の比なり
ひとり世をうしとて
かうしてはてつるとかや
ひくのごとくの日本
ありしかばしらしとも
公任の君宰相中將殿の
公任と宰相中將殿とも
人のをとこせうとにて。
公任は恬の相國頼忠公
乃男。和漢の才人。
宰相中將は兼信の
すけたる。雪ふる
除目にて。まろがれ
詩を立て。後徳にて。
まうすまいりたり。
兼信をば
誰。こうととばれ
遠国のおこせ一所乃
人をを誰こうかりとと
とばれくとこそ

おもうの人のなかりしかば
ふるさとに雪すこしうちはらはるるほど
黒戸にてかくとかきて
ふるといへばよわくなりぬ。公任の君宰
相中將どもの
すこし
こあるいはぬ
けひいるを
とひわつひぬ誰こうととへばうれく
といふてぞ。
の法いくへをいづこにかひいでん

おやのことうう
帝乃後法のくに名
の法寝ぬ
ぬれとて
ぬれひあくもはれ
とうちはそそ
うさもか
まつてうる雪とふ
そすまもはるとを
あしてる
うられうはう
ぬけ夕はきとうは
舟よそはたきうを
人もはしのの
とうれ中將
源後賢の四文左衛
門の男
兼のとけ
とうとこの久牛

とふひとうきさを法およは
定よりうんせさをんとすれどもうへ乃ひ
ばうくかかのごとりとりとの
ばうさはとくといふけよとうく
ばうへあうんはとりふるれはさけれて
とわうのくくかきてとせていで
えのとうんとさふとわびこれう
ぬけ夕はきとうは
事をしきとはりつうられ
うへばきとはゆるをとうの
中將ふ
そこめわ

忠貞氏の集作りや
子月乃さうし
浅嶽精進でふや
えんひ乃をひねりわ
和名云半臂 衣名也
桃華蘂葉云 或抄云
近代半臂ハ以小緒結
之往古之例ハ以大緒二
筋結之今世サ知人ミ
れぬ今案半臂と
いふもわり名ハ綾夫
ハ生乃穀を用ゆ。続ハ
らうと称をしてみる
結之ごいうる時のるす
ありとてするく
十二年の山こもり
法撰の
まさひろ 源方弘
左大権時明男なり

中将よくかいはせしかうちのかひし
ちるゝあうる袖
子月乃ゆうじとうしむる月 とうむひろ乃
をひねりとうじむる日 みちれへゆく人
乃あふ坂乃関こゆるれど うかれするたび
のみちのりあゆるれど 太ちんかや経
読経く六百巻と独しくよむいふ
清とぎやうひとりわたしくよみかりける
十二年乃山こもり乃とりめてのある日
付とぞり。但此草紙ハ往古乃大緒二筋をとりて
あるくしをひねるふ違るぞや。今世知人まれ
そとの例乃ぞまるひの袖とわし
まさひろハいうしく人わりけりて袖
方弘がかりてまとを
おやあどいうきしらん。ともにあるく
方弘が供乃待をも
あがられ笑をも

あかしまつるよふ
そばつゝくてぞ 人の
切く笑ひて方弘をそ
いそでつかりてぞとも
人よふはよりてきするを
呉本こきするを紙燭
につけやさゞあるハ
これハことへをも仍り
それハことへよきせりや
方弘りハ似合ずさる
おりてりそ
里りさのあのふうれ
方弘殿上ノ宥直を
て里亭へおそれ給れ
うりやるをくし
ひとますがめり二ま
すハいるや 一疋大
べき瓶ハ 二疋ハいて
じとし。一人にて二人
の袖ハえとらわずとも
瓶ハ方量なきなり

とのもりふと人ごとさをよんそてぞふ
方弘が供を人このもとにいそぎ
志ふかくなふとのそへはりつけいてぞへ
紙燭をよきて
おかゆるあてわしふ。とのことよくするあ
いわやりふ。下かさね乃とぞう人乃きぬ
方弘が装束に
あどとも人よかハよくてきするを
そことへ人うきゝ世をやあてゞりかり。
方弘がこゝろの
ぐふぞ頼つりひあのおやしきさ。男
よさのね袖とりまやうて。男二人をはれ
方弘が詞
といふよ。ひとりにてとりにかわれ
男乃詞
とのをといふよ。おやし乃男や。一人
方弘が詞
にてよろわ乃とのそハいてぞい
べきぞ。ひとますがめよ。二ますいる

人のかハのうちき
るこをもちてゐる
おうこに笑ひて
かまくらにはめやくこと
せうきうのうくく
うりふうや
山殿上のすみかてい
彼あつすいうんとて
墨まのあるたい
とりふうや

女院あやまて　三条東
三条院也一条院の後
母　おこ注
たつくひうきうく
宮のたてとわのたて
又ちいのたて京ちい
おりしうも

さていはねるうち
こうかいは退出のうち
おりしうく事とうき
あうりれい笑ひて

やこいつをあでう事とうこハあけ
までいうこうわふ人のつくひのきて
たあすいうとふをあるみてのの男
やう勾どにはめやくべる山殿上の
すこまはいはものぬとかくる
ぎいなさけあくぎこうりうきて
人のねとはめといふをくわふ女院
あやませのつて注使うきいも
出りうりぬん乃殿上人ハれくう
なりつるとうこ人のらへぶうれりあど要
人むりわいふまくこうとらへぞさていい
ぬるへともうけうつるといふをやさ

人すまのよりわきて
人のあきのうちちたち
のりうこふまてく

むくろこめよ　軀竜
金多みこうこうこうち
こうとのの

ちくくのの中の
隙月こケ月をと
あくくく中のの
おこ注
くくこいのうちちき
灯盞のトまこ
すくうち油単
はくうくくれ
油単小方ふの長を
つけうくくれ
くくふ川　和名　機示作
鞦　和名之大久頭　足在
桃多葉華云　鞦　練韋

わくふとくあやきき事よこうハあり
人のうりよわきて方ふたのつきてわ
きこえんぱ方ふたのうこうぱ
くくぱうるすあのてきちやうのうと
よよわくうれぱむくろごめよわ
ふをくふさいごめふとうんいひつくと云
てくわくふぢくくの中のの和
らすくくとうぐいのうち方ふたのくを
てくくくのすはくうとくくられよそわさくなのゆて
はくうくくのくくさゆんるれて
かくれしぢやくとうくいくくふれぬ
くくくくつのうちくきくはきくゆくは

乃小袖を着るとて
練貫を用ゆ若きも
白き平絹乃わわつ乃
頸つきのうへぬりて
美人頸ハ貫肩として敢
上の笠領なれば其盤
よつぎて食をも吹も
のはつさふい敢上人ハ
をつのぬを方ハ乃ち
出ろう豆をひしと
あふたれせき　近江
恵能王　武内宿禰と戦
おけて退しよ　武内宿
祢追てしてしりの奥
路よ恵能王を二し城
奥坂と云ど日本紀九を
ムきさの関　細流云奥
列乃菊田郡関也俗り
ムきさのせきとふ
きろうのせきとふ

まろうろこう　震動
ちんとう　ちてうの
頸はきのうへぬりて　敢上乃大らん
ろ人ハはずれまさひろハまめ
ひとうをとりくこちうじ乃うろ　一感し　小障子
ゆやをふきはなれ　方ハを八町てし
てわうろうろうかきりあきや
せきさ　ほの方
あふたれせきすゆの関　伊勢
ムきぶの関　奥列　ちゝ乃せき　奥列　衣乃関
ろうろう乃せきハちろう乃せきとうと　八代陸奥
表考
ろうろうかれ　八代　ようとうれ関
ゆうろうかうろうかれ　八代　ゆうろうかれ
きろうろうせきろうろう　八代　ゆうろうかれ　ゆの関　よろぐ乃

うろうきゆうろ只こゆると
ふ名と恨るとゆうとさ
とへうろうべうきゆ
いふうひれしうるうん
ろひうろうをゆ又恵王
とぶひれしうるやうれ
逢坂ちとをとて
逢べしと敢ろ人の国
ろうるまろうろうひ西
ろうバ信ろうんさ　逢坂を
集ろう頼朝ろ都ろうハ見ろう
おろうのうきのうろう
大荒木　八代山城
ろのひ乃うろう　出和　但
八代ろ吉のぶの森陸奥
ろうろうそをとうぶしれ
西ひ乃異ハ国
いうゆのうろう　盤瀬森
八代ろ大和　又摂津信
陸奥ろうるれ森　八代ろ
ろうるれ森

陸奥の奏ち弟の関の一名とやうとうろ
せきうろうひみうしうるうん
とうとうとうるうろうれうれをおうろうの
関とハいふうれやのうんぷあふ坂あうをよ
でろひれうしうばわびうろうん。
ゆうぐ　八代　うれ損ろ
ゆうぐせんせきさ
ようろうろうろうるれうるよろうれ必續く載
り逢坂ちうれバおうろうの関ハ逢きとをとれ

おろうのうきの乃森　ろのひ乃うろう　ろう
ぬれ　八代ろ伊豆　本拾森　後ろ　信大　ろ
ろうろうこうぶしの乃森　ろのうれうろう
いくうの森　うつきのうろう　ろうくうの
もうと　いうせ乃森　ろゆう乃うろう
ろうきのうろう　ろうきの乃森
ろうるれ森　八代ろ

神南備森　神南備森

こひの森　考　山城乃木

こもりの森　考

和名抄云金色

長谷寺　拾芥云金色

二丈六尺　十一面三

行元寺釋書云

淀乃わたり　古へ橋なく

て舟渡りせし川

なれのつねと思ふ世

なりて淀のわたりせ

しやと後撰の寺

あひの森　考　うねのもり　考　うきたの

もり　うへ本もり　石田山もり　いたるの森　ゆう

その森とつたへ今とゐるこそたのや

しなれ　もりあでいふべくもはべりとぞ

ひと本にのるをばうつせるぞ　こひの

もり　こそ　みもり

和名抄云海月　さ世寺　うまづと

淀乃わたりといふものを　のばゆ

車をかきて　ゆくに　たやうふこと

なしの　まらぶ　をぐらせれば

いとあでやかなることはべるめひの

あるまきとこそいふべかりけれ

文選北二謝靈運　蘋

萍泛泥深　菰蒲冒淺

清　金葉集

さらぬもの　きの

いて浅香れ泥よりなん

ものとりハ花を

六帖寺　これ花

乃宮　もるもの

も我ハ　て物

こそ　よりも

湯　温泉乃事

博物志云凡水源有石

硫黄其泉則温

七久里湯　八代乃伝法

ものこと　同こと

ものどもこれをよみなるらむ

とぞ　こ月とゆ　ゆ

ぐう　降

いとちいさきのハ　ふ　て　笠の

おのこわ　ハ　ものの　も　扉風乃之

りいとう　みもり

湯を

あくらの　乃ゆ　玉つくの

湯

はねもの　考

元三乃車の　と　名　あくき

乃　ぶき　ものねさくり

あでこ イ本山下ろう
さうぶ行う菖蒲
ねぐらうかめぐ
桐壺巻云不出
楊貴妃の形ばかりぶき給
師と云ぶも涙あれば
ひとりぬ
みきしたるぐひ
おもさかさわすれ
ちりとはなさかり
ちるも生ありもの
松の木そしらの鹿やでハ
ちるちちちちもの

かきしまきわするもの
松乃木 秋乃野 山ぢ 山沢 鶴 鹿
みくハいくらもきこ友ハ世よちるど里き
ハいくらもきこ友ハ世よちるど里き
韓退之詩云 肌膚生鱗甲 衣被如刀鎌 氣寒鼻莫嗅 血凍指不粘圍
炉不覺煖獸炭屢已添
友ハちに ちるどあつき
土さ さけてちるも我袖ひめやけてうあるどてと拾遺
孝行の人のる 介雅釋詰
日善事父母為孝 無日
竟孝之道孝矛而已

あるもの
あれちる
孝ある人乃子 鹿乃ね よき男れつ

孝経云子曰夫孝德之本
也教之所由生下男
行ありけいひ
へさ
る嘘のめる ねハ顔
突 ちれ
陀獄 進 別 ちれ 泳勤 礼
ねる 金峯山の
金剛藏王ハ釋迦
現在観音 尚来泳勤
さ 夕顔 ま
けちじみ
ぶ こと
ぐきこゆる
ら ハ
ぐむる
ちづる の 月精
進 金峯山 参
信賢 六条左大臣 重信
云の息宣方 れ 誰

きがけ
の
ちを
うれ
彼れ
めさ
づる
こ
ハ
ちづる
ちれ
ぐす
人 ときこ
ぐと
ぐ
信賢ハ
よき

やつれて青ばみたるものなどは
なほ衣のもとをとりかへ
るなどとしたるもいとよし
と　金葉山の花もとを必
ぬぎやつれたるもいとよし
ものなどいとよし
あをやまきのいろ
桃夭葉葉衣色　天說
青山吹　表青　裏黄
山吹二月も用ゐる
ものなり
すいかのようなる
物　延喜式　主殿助
長保三年　花人年九
三条天皇定方より
五代　高辻宣孝の
母なり
すいかん　桃夭葉葉云
水干奉納　又云八月
十五日　大納言乃

時なれば　ものの
ひとくさ　ふかくなりぬれども
よきころなれば　ものうるはしく
ひとしたるものなり
くるふるとの
十月一日のころ
詩　豳風七月篇云十月
蟋蟀入我牀下
きりぎりす　秋のなるまでにはうち
こえのをかのかべにはいく
秋ふるまこもの　千載集　秋歌乃
家持集　秋歌乃
茅ぐうの人乃白露とけ
さずて玉ふ出く物
かな
川竹の風ふ　イ本　久書
吹る川竹乃風ふ
ものうるめさまして
ものうるかりの山をこえ

かりにもあるとおもふにけよ
いひんなるものなりとぞ
表なる事　あるべし　九月二十日　十月一日のころ
ぬぐ也
ふ　あるもあきふかきつけるきわ
ぎすの乃こえ　みとりの乃ようにきて
ふる　秋ふるき屋乃あさちふ　表
乃いろ　玉のやうにひかる
川竹乃風　ふれ　おとつれ
めさまし　ものうるもすべ　松ひ
かなる　ものうるわらべ　乃中まで
ものうるかりの山をこえ

二十六七日　こうけのあ
むゆるのとうとし

年をとりまして
年をとりまして
朗詠　香火一炉灯
一盞　白頭長礼佛名
經をと

いとけなくしかあるねるれ
一就をも苦くる家の
蔭蓋あど生くる亦
みくぶるを
寺ることり　こ井る
うりやぶそくをとも

服装
二十六七日　こうけのあ
むゆるのとうとし
てぬあくくとれがあるまきるにぶが
とげあるる月乃山のとちくくてくる
こくいとあつられあれ　秋の野　年うち
すくしくる侍ちりをこあひきてる
あれる家よむぐをひくくアよりぎ
あどくくあひる庭よ月乃ちあか
くあきいとなくふいあくねるの吹くる
をちり例ひまひ　寺ることわくるいくくをく
月うり　雪ちうおくるくかうれあるど
りかうぬきとくきあるいとわう

博階
初陳うあ
うつあ初陳の樓う
のうりのふぎりの
れくくいくとの本を
まぢくうはちて
ドちあ海くあいは涼
くくとゆくくはくと
りびどうちくる　小神小
革ばうあて衣きぎ
あるやうりの八笑斗
りひさくうり
てくるあくいかのつ
ちくもあくし思ぬる
くつがをうくいは無悪
やあやうきけがしるき
俱舎乃ちゆ
大藏經綱目指要録云
俱舎頌一卷　天親菩薩
造也說一切有部作八
品一分別異品四十四頌。

とりせあど
するりどくれちりくくは
ませくくそふるびどうちくるわう
き法師くくのあばといあをつきて
いさうつけとあくおるとのわるとく
はくもあきを紐乃ちうちよりけ俱舎
りちゆをすくくいひで者のるとく
あうつけくれ　わがのぐふ
とあやうくとくよりわてかうん
りの廊のる捌　彼法師くくのやくくゆし
おさくくゆくくのをは板ちきあるよ
やうにさひくもおくはねたくうわ
あどいひくくりどくきてるを

二分別根品七十四頌。三分別世界品九十九頌。四分別業品一百三十一頌。五分別隨眠品六十九頌。六分別聖賢品八十三頌。七分別智品六十一頌。八分別定品三十九頌。已上六百頌。為論之本也
はうくわ
和名云深履其頭短者謂之半靴 桃葉葉云靴 深沓同事也。云々靴氈ハ赤地乃錦。靴帯ハひきりハ皮也。昔ハうら猪なり。節会の時肉色の公卿の用ひ行幸供奉の時用之
又云半靴ハ御幸の供奉直衣騎馬乃時用之

よその青侍の人ニ乃さるもきぬくさありひきせしあどしるも
あるもとかくきぬあとこえく立てたう（裳 背子し）
ぶきてるもなり。かつくつきうくてあと（深履 和名 半靴 和名 半靴 桃葉）
ときそてらう乃わらあとくつもわつるハ（摩靴 江次第 沓辺）
うちわくわめきそて又おりしうちとあで（大内乃や あるもと 内沓 あさまとも）
ゆるされたるわかき男どもの家の子など又
立はぎそてうこことハおちうちる下り（その青侍 此男乃内 入ルヘし）
侍めるもおかしるあどきへゆくはよの（かの者し）
かのかんとちくたりおゆみたいづり（侍りる近し 先立し）
とのあどをたけり。人乃おりしおすけかく（従すき男家ろうの制とる）
そまづらぬわざあわあどいふを心えて
すこし立そるるもなり。又さし

我すけらく佛乃たすくるとゆくし（こまく）
あるもはかねよゆくれども人乃ねる（居並）
みえるせんをとそるもゆけばいとうさ
てあるよ。大小せきさ乃中を見いれさ
あれちいらくふらくおどそ月比
をまうでするつんとそすゞ心
もおこしさる。みあり常灯よハありで（内陣ハ他不のひとのむかし灯明なり とうみやう）
うちま又人乃なかわるる。おそろき
まぐともしるふ。佛乃きらしくと
見しかるいとくふとけすでごと
かみをたけくらいえんよもひて（礼版）
ろぎちくふとも乃ぞくわゆらくもて（論義 抜言うや 動満し 発動そろし）

大小せき乃中を
獻菜あれおらるる示
乃さるし

まりさりこさる
こゝうつきしあきを
見るおりせ信仰の
心發起しるとし

てつうふかくをさけて
常灯文あるべし
欣ひ又まてし深以於
つれずしも初風
うくこおしかな
事なり

みとうの法心さし
手燭ともし来る
へし　すまぬきんごを
香箱法事かしら灯と
おれハ　すみ見つゝす
おびらきけく
かけゆびのさるや
様すがたのやつせる
装束なるべし

法師乃ゆかきく
法かの肩衣の法師此
書をあらし歌大法会
志らくの人ごとをせ
まり　それ法かの若
坊の法師我をとをみ
ことりかへなる人のす
ずかうりきやそ帰る
さきのかり

これそことりたてまつりてゆうわくべく（大法会のこうりし人をおもしろさるし）とおもひねよせめくちもりだしける菴菴乃ひとやかりすまされず。みとうの（法かの法灯文の引るゝ）法心（こゝろ）しいなかりの法さめてわつふ（それの法の法のこゝろ）きこゆ。わびしうちみけるかなしまふ。こうかう法かゝりひるくちきそれ（法かのこゝろおし肩衣法師すの志きとゝをつゝかし）枝をぬりくとぞきさる事のふときずをも拝ねりし。大かたせばきみちさら（法かのかゝしきんを佛ちやせしとて）法師よりきて、いとゞ待ねいくりだりことをもせずふべきなど、やすらふちつく（云ことを）乃人ことを立まりなどひきうせく（法かの為）いぬるするりら火なけるさ拍そ（草ちし）

もんらく
匜（ハンザウ）和名云柄中有道可以注水之器也。俗用楾字所出未詳。或説云有柄半挿其内故呼為半挿。
これとこれ人いりの坊り堂まえの法かの居狭（せバ）くれば供（とも）乃人ハ肩坊へとゆきて
ずぎやう乃諸のを（誦経（ずきやう）鐘也。）彼諸乃経をよむすし源氏浮舟まよひすぎやう乃かねの風よつきくきこゆるをつくとゆかまえきゝ我がなありごきけハ我よましむ彼諸の諸のちる成々りときうつらむさせまり彼男此おやかねつき

さはかけすさんげらいをのまさとふれて（肩坊のかおもて借るとし）（匜ハンザウ半挿とうくこきのなれ）
さみれるとなきなどおりし法きもの（盥 和名手洗月）
人いりの坊りそでいひくよびとてゆ
けぞがそわくぞゆくずぎやうのお（人いりのこうりてかりとし）
乃をと気ちなりときけばおそらく（わかれんのしとむへし）
きこゆ。かくりつよろしき男乃いと
母びやうなぬりなれば法くさちかれども（額突（ぬかつき）しれねとし）
心おんとゆしるがいつくさひ入さる
そきかくはをもねずとこなふこゝろを（不寝し）
おそれあれ。そちやすむれどハ経るく（そゝりの男の為し）
いきこしねがなよるとさとふとげ
ありつくらむ出させかりきそう

経をも言ふ〜ず張
を。造そく御よりぐ
させるるりきと
けさやふ あざや
うりかへ〜あるも
月はこそりくるま
おもも日はこそう
まりちべし
くやうはそ
おこハくやうに屋
根さいぐ〜ハあわ
しとあるくし
ひをいとくう
昔ハナニ時よ貝を
吹しよ載集よ
名も赤午乃貝こう
吹つられひでのあ
こ近付ぬし赤潮
すきやく北地 誦経
の布施ぬりう。法毋
乃ゆきり。法も

鼻ひもくいのくいぐんをけざやうよきて
ハあ〜ですこ。西びくかこさ
あ〜ぬ。ぬるすをかふんぐれをかる
成就させまいきこと
へざやこそうたゆれ。日はこそわ
くるるまひるハとこのぐたく
やうハるこ。法師乃家者法師乃ほかのこたち
わ〜こ。べあでゆきて。ほれ〜ある
こ。かるりまひをいとこる
く城よふき出ることうどろ
るれ。きこげあるこそぐあるぬ
ぬ男乃。ずぎやう乃地うち亜
こう童子あとよぶこる。山ひぎ

きやうせるこ〜こ
られ乃おゆ久ぐ出
こ〜こ〜こ〜きこ
こう童子
堂童子ハ法金れは
花笥ををこひなき
めぐすあぐ法華
う仏ぐこふ乃こ
ま。禁中の法ちよこ
座吟中圖おこ
ぬさんこ〜ふ
法産乃初祷ぐ
さぬ。平小ちの人ど
教化ちこ〜こる
法花をのて山仏験
むりこるきき由と
教化きこするや
屏風ぐのこき
役通衆の人ぜ居と
ひこりんこ〜こ

あひ〜
ひぎさ
どふ。やん
ぬさんし
すこ産のこ
ぐ〜こ。これハぐあるあり乃こすあ
めり。ひ月あぐあこ。いと地さハぐ
地の立義のこ。ぬこあぐする人乃ひまるくまづ
あこるれぐよをこるひもこやれぐ。
月乃うこ素猪ちこ通衆の人こ今こ
ぬめり。小法師ぐ乃ここ人
あ〜ぬ屏風ぐのこ。いとよく

きこ〜ちふきこゆ。詳経のこ
教化ぬ。

いしとりちんさい
進退也屏風のうら大
ちるをとらくしそしろ
ひるうる

ちんさいりてみどりこそさく
ごとれだ。ではねうしくだ世
ぎてすれをちくとくるうで
ぐいらくたはけるやすげちる。
ぢよくとあちこおるてたるち
ちよくとあちこおるてたるち
そいはるるるるるるる
ゆるうる

いやーくずちのびやうる
しる人乃いやーくずちのびやうる
ちけけちひいかくちるるんうの
火用心のうるうるうるうるうる
うちおやうるうるうるうる

ぬ乃事せいせよあで
いふをあるる。ぜけはつぶりちるるちのこで
乃あいぎやうしばきおごろしる老は
ちちひいのはくちるるるるるる
ちちひいのはくちるるるるるる

ちちひいのはくちるるるるるる
けけひをいとおりしくはくるる

いぎやうはきおごろ
しるうる
ちちるるるるるる
ちちるるるるるる

おのの乃母うちうち
出しん　彼ちだれ姦
乃乃をしひ母うひひ
ひひうるうり
これうんとうとうる
乃　こうめのし母うと
ていちうんとうとうる
ふきうる

ちこ乃ねをびれくうちちちちぶきうう
けちひちちうはくちるはくちるはくちるはくちる
うちちちうはくちるはくちるはくちる
ちちひいのはくちるはくちるはくちる

ちちひいのはくちるはくちるはくちる
こちるひあうすねいくちつるをぶやう
ちどちちすくうちやちちねねる
くくりちちるの佛經をいとなくちる
ふくうちちちちちちちちちちちちちちる
くくちちちちちちちちちちちちちちる
法師乃よりむかめりこうちちちちちちる
てあれるはきこゆ。又よるすてハくハ
ちちで。人こちの人乃ちちちちちちる

ちる乃佛經
くくハ初断くくハ
觀音經うりはき
くくハ薬師經乃
くどハ

花田うゑのこきさ
あをゆびのひとねはそこばかる。白
きゝ衣どもなきそまどもなめわせ
ゆるるのきちのこれおうちうちの
ぐきてる。わらへらぱつひの畑
どもあちこかしこわいねうちるも
ちかしのうねきくるくのさま
ちのうめよ扇用そぬのもど
すくはくかわかかちぬハ誹ちんを
いとゆうしちハさるかわとえるも
むしわるきさ人どもハこくはがねごと
ちのちちちちひくゝ佛のれうこ
ちめえやちをゝず別當ちどよひて
うちめきぬちくゝ出ねうせ鈴

二月廿日二月朔日
二三人探
ちぬきれとそあてや
ふるさとぱもぐきおのよ
ちうぐくたうちるちぐろ
ちくこねわわふもこうだい
ちぬうぐいろくのきぬ
すわちるえうのちぐきせわ。
ちるるどおくせくぬきくわう
やのうるものちどちぐくごんぐ

ちせ鈴こえのしろ
ぐすきそハいえの
すいうのはきちぐ
けうちゝ

さうゝのをやき
直蜜或ハ粉衣ちぐ
や鈴ハ表白裏赤
花柳ハ表白裏赤
はきくきちのこう
よいこうちくぐ
ちうぐくちうちる
ちゝうゝ
ちれ餅袋ちのぐ
よいぐすきてる。裏
ちとすのちせてきる
こうのちこ
すわちくこ
すわちくこりれ
ちうちぐ

ごんぐ　金鼓　和名云
最勝經云妙音菩薩

於夢中見大金鼓(ダイコング)のことあり。佛(ホトケ)まします。天人(テンニン)の声をあげ、さんとして圖書金鼓(ヨコゴング)をうつ。又唄師(ヨンビヤリ)音聲(ヨンビヤリ)を数せんとせし。金鼓を打(ウツ)あり。江沢第十三ようあ
いうでのいたづら
ぜ方りはんなれども
ひるまあるそこ分ねを
我こはいのでたづらんと
すぐろ例のうぬ不よ
寺ぬよぬぐす越前
常ろうぬ不ろ様居ろ
ど世人よ。我一人半第
るはうひろ。同一宗の
女衣なまのどぞて
ありくまろ
ぬくこうもさやろ
ほかのこうす男と

うりうろ
人あれど
ぬるこうは
圖書(ヨコゴング)金鼓(ヨンビヤリ)
又唄師(ヨンビヤリ)音聲(ヨンビヤリ)を数
せんとせし。金鼓を打
あり。江沢第十三ようあ
いうでのいたづら
ぜ方りはんなれども
ひるまあるそこ分ねを
我こはいのでたづらんと
すぐろ例のうぬ不よ
寺ぬよぬぐす越前
常ろうぬ不ろ様居ろ
ど世人よ。我一人半第
るはうひろ。同一宗の
女衣なまのどぞて
ありくまろ
ぬくこうもさやろ
ほかのこうす男と

かやうろおりよやくれ
ざくおなをろねぬ
くとく

心つきうきぬ

山路形みもして人
のりてとふいてはあ
のりてきねるこさ
あはおくよろしく
あれいこうよはせす

こうなめれ。なざとぶねよびてあ
くるはいいうで
こうろづきあきよの
まりこうぎまどすぐろおのこれろる
ねえ車ようひもりのうろる人こうの
きぱいろる人るのんやんごとおろすと
をやろきおろこどもの物ゆうをぶひる
あど川のせうこうんようすきけうり
うぶひろかうよりてぶひんうきろわ
ぬろんようぶうわ心せろうけあうきこち
らんろぶあおゆる物ものきぬる人うし
ものうづる日の面ふ人すの我をば

おがさずはぐくみ給ふ時の人なども
をわのきこえてる　人わかすこゝもせ
おほ人乃ぞをかわごとうちすぐろる
れ給うらんーわれさうめる
わびしげ　日新しあきらけ　ひの道
六七月乃もゝひ川ど乃時ふうにまて
あげ　ある車　うつせ牛　ゆく
ぶしゆく　面ゆかぬ日　ちわむ
ある車　ある日　わむ　せあ　年
きこえる　乞児　食ハ家貧皆作ケ　ふ　保と　ちしき　わを　見さ
みと　げと女乃ある　なきざる　ゆき　ひ
ちいぢさ　板屋の　ふうきて　げ

うちむ　雨霧ひ
脈車　ふむ
を　西京記
ふ　ひう
ふい　乞児　和名云
列子云　齊有人負者
常乞於城市　乞児云
天下之厚莫過於是

和名加多乃牛

ぜんくちて　お陸
ちるのうくく　佐ち志
ふる
あのいされと　ち
あり　れても　その
やうをうくわぐ
うくく
すいきんの　近来乃流
長し　張翠軒を　近来乃
れ上蘭を　ちを
紫民下元民　る人う
佐ち　ふる　牡丹　袖衣
冠　ふい　ちを
わぬ　ふ依て　出立
のうの　げさ
袖袈裟　納　和名云　俗云　能ネ。智度論云五比丘白佛當著何等衣佛言應著納衣
袈裟　和名　袈裟　天竺語也此云無垢衣　功德衣。俗云　坐作
てゐの　出居次將　賭　ぐる　常鉢　ち　上の出居　弱　躍

猶ぞ。ぱ。ぱ。ぱ

我がうとんじたるこゝろ
男は心中を察するに
泪しぬ女の我がうきをもうく
人かりそめとなりて只
つくあの女のうとうる
と我をこゝろうとうる
てる成りわとのこゝ女の
ゆうんりこ男のこゝ加
りきこゝ
心もちきこゝ加ありと
みおうでこゝ出ひつめてる
男に弟こゝ八宇もちき女
うこえこゝくしこゝう
うこゝ
きすぐる人のうこゝば
さやこゝる性ちき男乃。
くりこゝ人のこゝすはこゝを
ぐきこて。我が妬をひつ
ゝうこゝ
うこゝあこゝす成こゝる
彼女仕つ人の懐姓女
をも性ちこゝん性こゝく
事をもとりあこゝを
やこゝこゝこゝ

男の心を推察するをば
我がこゝこゝ
をば
うとなりしやすんとさふこ
ちあきこ加るありとふ
人まあ人ぶこゝ
こゝれいであられこゝありとふ
こゝ
こゝ
こゝ